

文学史研究の方法を探る—文学史研のみなさんへのお礼と呼びかけ—

2010. 05. 22 坂田貞二

H. ドゥヴィヴェーディーの「わたしたちの古い文学の歴史の資料」は、エッセイ風の短い文章ながら、インドの文学を研究し、その文学史叙述をめざすわたしたちに道を示してくれるようです。

今年の1月ころにそれを試みに訳しました。それが水野先生のご高配でみなさんにきょう配られます。

この文章は、ドゥヴィヴェーディーが1940年に刊行した『ヒンディー文学史序説』（邦訳は、H. ドゥヴィヴェーディー著、坂田貞二・宮元啓一・橋本泰元訳『インド・大地の讃歌—中世民衆文化とヒンディー文学』春秋社、1992）の論旨を確認し、文学研究のための資料を広い目で求めようと呼びかけるものであろうと理解します。それで訳してみたのです。

「わたしたちの古い文学の歴史の資料」と『ヒンディー文学史序説』は、いまから70年もまえに書かれたのですが、いまなお新鮮なメッセージを送ってくれます。私的には、わたしが生まれた1938年ころにこの文章と『ヒンディー文学史序説』が発表されたことに気付きます。

ヒンディー文学を研究するインドの修士課程の最近のシラバスで文学史の項目を見ると、わたしが1963年にバナーラス・ヒンドゥー大学で学んだころと同じ基本文献が多く載っています。問いたくなります、「その後の文学史研究の成果はどうなっているのですか」と。

さて、現代文学をあまり読んでいないわたしですが、『短編小説のなかの村』に収められたS. R. ハルノート 作「村は掌中に」（1996年発表）が、山村で地主が下層民を操って私腹を肥やしているさまを描いていることに注目して訳してみました。文学と現実が、ここから見えてきまじょうか。これは、文学史研で印刷・配布していただくように寄稿します。

またわたしは、作家の生涯から作品を理解する手法にあまり意義を感じてきませんでした。ところが廊下に高く積んだ山から落ちてきた本で、モーハン・ラーケーシュの「流浪の日々—作家の述懐—」（1980刊に再録、初出は『サーリカー』誌）なる文章を見つけ、一気に訳しました。かれの作品はけっこう読み、なかの何編かを訳してきましたが、「—作家の述懐—」を読んでかれの作品に暗い陰がついてまわるわけが少しわかったように思います。これは、『ヒンディー文学』に寄稿しました。

こういうことを全体として考えると、わたしはいまなにをすべきかに気付きます。

ある文学に親しみ、それを理解し、人にそのさまを伝えるには、こうするのが一つの方法です。

- ①過去の文学について、「文学」を知り味わう資料を広い目で見ろ。
- ②いま進行している文学場面はいまを生きる人間にとって大事だから、文学の過去を見る「文学史」にとどまらず、現在進行形の文学作品にも目を配る。
- ③作品そのものを読みこむと同時に、作家の評伝・自伝も見逃さない。

かく言うわたしは、これまでにインド文学史のようなものを少なくとも3点公表しています。

- ①『インドの文学』（田中於菟弥氏と共著）1967、明治書院。総頁数261頁。
- ②『南アジアを知る事典』（辛島 昇、前田 専学氏ら10名とともに監修）平凡社、1992。
南アジアの言語・文学ほかを執筆・監修。
- ③『インドの文学II』＜週刊朝日百科 世界の文学 116号＞2001. 10. 14.

この巻の編者として、近代語によるインド文学を概観し、ヒンディー文学への導入などを執筆。

昨年の10月に行われた日本南アジア学会の文学シンポジウムで考察の資料を提供したわたしは、それに補足して『南アジア研究』の2011年号に「バクティ(帰依信仰)文学が形成される場、それを囲む思想的・文学的な伝統—『ラーマーヤナ』の16世紀後半ヒンディー語版『ラーム・チャリト・マーナス(ラーマの行いの湖)』の事例を中心に—」を寄稿します。自分が4度目の文学史を書くときはどうすべきか。作品を味わう、関連研究に目を配る、自分の見解を表明する。そう意識しながら、シンポジウム報告への補足を書きました。

研究仲間と学びながら、新たな途を拓くように努めます。学ぶ仲間にも恵まれているのですから。